

## ウィリアム・ウェブ・エリス神話と『ラグビー・フットボールの起源』(1897)

阿部生雄

**Mythicization of William Webb Ellis and  
“The Origin of Rugby Football” (1897)**

ABE Ikuo

## Abstract

This paper analyses the famous booklet entitled *The Origin of Rugby Football*, which was published by the Sub-Committee of Old Rugbeian Society in 1897 for the purpose of publicizing the truth of W. W. Ellis's legend. The motives, the way of enquiry and the result of investigation in the Report are precisely considered here. So far, many scholars have paid their attentions on this Report from the historical and sociological point of view in order to explicate the process of mythicizing W.W. Ellis who allegedly introduced a great innovation into Rugby football. This paper reconsiders the thesis presented by Eric Dunning and Kenneth Sheard, in which the legend of "exploit" by W. W. Ellis should be understood on the historical setting and structures including modernization, professionalism, commercialism, and proletarianization. Although the thesis is not deniable, yet the re-analyzing of the Report might give us a chance to propose a new hypothesis that the issue between the Old Rugbeian Society and Montague Shearman could be a confrontation between rugby players split into the Old Rugbeian and the Rugby Union. This paper concludes that the Report was unsuccessful to testify the legitimacy of the "legend", but successful to establish the eternal "myth" through its publication and their school's new affiliation to the Rugby Union.

**Key words:** William Webb Ellis, Myth, Origin, Rugby Football, Rugby School

## I. はじめに

ラグビー校のフットボールは、William Webb Ellis (1816年入学)が1823年にボールを持って走ったことにより、大きな変化をもたらされたと言われる。いわゆる「ラグビー・フットボール」の誕生である。今日神話化されたこのWilliam Webb Ellis伝説は、1813年から1820年にかけてラグビー校に在籍していたMatthew Bloxamの校友会誌 *Meteor* への投稿文から生まれたものであった。しかし、1887年度に出版された *Athletics and Football* の中で、Montague Shearman (1857—1930)はそうした個人的、偶然的なルールの変更の可能性を否定し、プレーグラウンドの規模がラグ

ビー校の粗野で民俗的なフットボールの残存を可能にしたという下部構造の決定性を主張した。本研究は、Shearmanのそうした批判に論駁すべく Ellis伝説の正当性を調査し、報告しようとした *The Origin of Rugby Football* (1897)の主張内容を分析する。

## II. 先行研究：DunningとSheardの見解

この報告書に注目した先行研究に Eric Dunning と Kenneth Sheard の *Barbarians, Gentlemen and Players* (1979)がある。その中で彼らは、報告書と其中で展開した Ellis伝説に対して、次のような見解を提起している。① Ellis伝説(the Webb

Ellis story)は、「この仮想上の事件」(the supposed event)が起きる3年前に学校を去ったMatthew Bloxamが言い出したもので、しかも50年以上もたってからの回想をもとにしていること。<sup>1</sup> ②この伝説は、1890年代にラグビー・フットボールの発達に影響を与えた様々な影響によって生まれてきたこと。具体的には、「プロレタリア化」(proletarianization)というイングランド北部の労働者階級へのラグビーの浸透とリーグの出現(1897)、アマチュア対商業主義／プロフェッショナルリズムとの対立を背景にしていること。<sup>2</sup> ③Ellis伝説を調査するOBの小委員会の設置と報告書は、「基本的に、彼らがくよそ者>(alien)やく劣等者>(inferior)と見なすような集団にまでラグビーが広がることにより、ラグビアン達が自分たちのゲームに突きつけられた脅威と受け止めたことによってもたらされた」と考えられること、つまり、Ellis伝説に正統性を付与することによって自分たちの結束を固め、くよそ者>の脅威に対抗するための手段であったということ。<sup>3</sup> ④「Webb Ellisがそうであったと目されているような地位の低い個人」のたった一回の行為によってラグビーのゲームが根本的に変わったという説は社会学的に妥当ではないし、その変化が永続的に望ましい修正であったとする根拠を提示していない。<sup>4</sup> ⑤したがって、Ellis伝説は「現在支配的な社会構造の原子論的イメージや出来事の構造なき連続という歴史過程の考え方を反映した「還元論的起源神話」(reductionist origin myths)であり、より厳密な社会学的説明、すなわち、ラグビー・フットボールの固有性が英国の近代化と工業化と関連して生じたという説明が必要であること、<sup>5</sup> という5つの点に整理することができよう。このように適切に導かれた見解を論駁する事は出来ないし、またその必要もないだろう。しかし、DunningとSheardが「オールド・ラグビアン」の報告書の詳細に立ち入る必要はない」<sup>6</sup>とした点については、彼らの提起した見解の正当性を検証するためにも問題がある。本研究は、たとえEllis伝説が「還元論的起源神話」であるにせよ、その報告書がどのような調査と調査結果を踏まえてEllis伝説の正当性を主張しようとしたのかを明らかにする。そして、Ellis「伝説」が「神話」化していく背景にもう一つの背景、つまりラグビー校とラグビー校以外のラグビーを採用する学校、もしくはラグビー・

ユニオンとの間に、ラグビー・フットボールの統一をめぐる論争があったのではないかと、という可能性を示唆することにしたい。

### 3. ラグビー・フットボールの起源調査に関する小委員会の設置の動機と経緯

オールド・ラグビアン・ソサイエティ (Old Rugbeian Society 以後ORS) の小委員会(Sub-Committee)は、1895年7月に、ラグビー校のフットボールの起源を明らかにするために設置され、委員として、H.W. Wilson、Herbert H. Child、Arthur G. Guillemard、H.L. Stephenが任命された。その報告書、*The Origin of Rugby Football, Report (with Appendices) of the Sub-Committee of the Old Rugbeian Society, Appointed in July, 1895*、は1897年にA.J. Lawrence, Printer to Rugby Schoolから出版された。全体で45頁の小冊子で、1846年と1847年のルールを含む7つの付録が付されている。<sup>7</sup> ORSがこの報告書を出そうとした動機は、直接的には1887年に出版されたMontague Shearmanの*Athletics and Football*での主張を論駁し、OBであるMatthew Bloxam (1813 - 1820在学)の説を裏付けることにあったことは間違いない。しかしBloxamは、既に1876年10月号の*Meteor* (ラグビー校の校友会雑誌)で、*Standard*に掲載されたある手紙に反論する投書を出し、Ellis伝説と深く関連する論点に言及していた。*Report* によれば、その時点でBloxamが主張したのは「現在ラグビーで行われているラグビー・ゲームは、<偉大な知られざる古代性を持つ>というその投稿者の信念を変えようとして手紙を出し、この問題を既に提起していたのであった。そのとき、彼は、この問題の代わりに、ボールが手で運ばれ、それを保持する者がそれを持って走ってよいと合法化されたルールに関しては、彼の時代、即ち1813 - 1820年には知られていなかったと述べており、さらに、それがアーノルド博士の頃に導入されたとしている」ということであった。しかし、1880年12月に彼が寄稿した*Meteor*の記事は、その寄稿の数週間前に*The Times*紙に掲載された「アソシエーション・ルール」と対照して「ラグビー校フットボール・ルールとプレー」を論じた記事に対する、反論ないしは補足であった。Bloxamは彼の記憶が60年から67年前に遡ることを断りながら、1813年に入学した頃には使用可能なプレーグラ

ンドは4エーカーしかなかったこと、「島」(island: Barby Road 側の運動場の一角)が依然としてあり、現在「クローズ」(Close: 運動場の名前)と呼ばれているグラウンドが分割されていたことを確認した上で、Bloxamが生徒であった頃のフットボールのやり方を紹介し、「アソシエーション・ルール」と相違する固有のラグビー・ルールが、1823年にWilliam Webb Ellis少年によって「偶然に」(without premeditation)もたらされたものである、と主張したのであった。

「全員がクローズに集まると、スクールの最良のプレーヤーに二人がそれぞれのチームのために一人づつを選び始めた。各チーム約二十人位選んだ後、残されたファグ達に対してやや雑な組み分けがなされ、彼らの半分は一方のゴールを守るために、他の半分は同じ目的のために反対側のゴールに付けられた。特別に選ばれなかったファグ達も自分の属するゴール側でフォローアップしてよかった。彼らの何人かはその争いにいつでも入り込む用意ができており、他の者達は時折訪れる思いがけぬキックの機会を窺いながら、注意深くハーフバックを守っていた。ゲームのルールは少なく単純であった。グラウンドの側面のタッチは線で画され、いかなる者も相手側のゴールに向かって手でボールを掴んで走ってはならなかった。それはフットボールであってハンドボールではなかった。多くのハッキングはあったが、ほとんど乱闘にはならなかった。」<sup>9</sup>

「1823年の後期、約57年前のこと、偶然ではあったが、ラグビー校のゲームをアソシエーション・ルールから他の何よりも異ならせたルールの一つがもたらされた。William Webb Ellisという名の一人の生徒が、手でボールを捕らえたのであった。彼は、タウン・ボーイ(town boy)で奨学生(foundationer)、1816年夏の休暇後に学校に9歳で入学して1823年の後期まで在学し、最後の後半期にフットボールのビッグサイド(Bigsid)に属し、その間プリポスター(praeceptor: 級長)を務めた生徒であった。そのようにボールを捕らえた場合、当時のルールによれば、彼はボールを手放すことなく、可能な限り早く、バックへ退却すべきであった。というのは、彼がそのボール

をキャッチしたその地点へ、敵側の戦闘員のみが前進し得たのであり、彼がそのボールをパントするか、他の誰かがキックできるように地面に置くまでは、彼は前方へラッシュする事が出来なかったからである。また、当時、キックによって獲得されたゴールの殆どは、これらのプレースト・キックによってなされていたからである。しかし、そのボールがグラウンドに触れた瞬間から、反対側のサイドは突進してよかった。Ellisは初めてこのルールを無視し、後方に退くかわりに、そのボールを掴み、ボールを持って相手側のゴールに向かって前へと突進した。そのゲームの結果については私は知らない。また、私はこのよく知られたルール違反が厳しく追及されたのか、それがいつ為されたのかも知らないが、今日それは、正規のルールとなっている。」<sup>10</sup>

こうしたBloxamの指摘を踏まえずに、Montague ShearmanはJ. E. Vincentと共著で*Football: its history for five centuries* (1885)を出版し、その2年後にBadminton Libraryに含まれている一冊、*Football and Athletics* (1887)を出版したのであった。後者の本の中でShearmanは次のような点を指摘した。

「一校だけが広大な敷地の開けた草地のプレーグラウンドを殆どその設立時から持っていたと思われる。それはラグビー校であった。この故に、我々が予期したように、ラグビー校だけにそのオリジナルゲームの原始的形態(primitive shape)が残存しているのを見出すということが生じるのである。」<sup>11</sup>

「我々の見出し得る限り、ラグビー以外のいかなる学校も、プレーヤーがボールを拾い上げたり、それを持って走ったりすることが許されておらず、彼の敵がカラーリング、ハッキング、チャージングやその他の好きな手段で彼を阻止できるような古い型のゲーム(old style of game)を行っているところはない……いかなる原因がラグビー校当局をして他の学校の管理者と異ならしめているのか理解することは困難である。しかし、ラグビーゲームは元々ラグビーだけで行われていたものであり、他の学校は大なり小なりキッキングゲームを修正した形式を用いていたことは大筋、明らかである。」<sup>12</sup>

Shearmanによるラグビー校のフットボールに対する<primitive shape>とかくold style of game>という評価は、明らかにラグビー校関係者のプライドを傷つけるものであった。ORSによってラグビー・フットボールの起源を調査するための小委員会が設けられた主要な動機はそこにあったと言って良い。

しかし、ORSとShearmanの論争を読み解く上で不可欠なもう一つの点が存在する。それはShearmanの微妙な立場であった。Shearmanはラグビー校出身以外のラグビーの名選手であったからである。彼は、Merchant Taylors'校の出身で、在学中の1874-1875年に主席(head monitor)となりラグビー・フットボールのキャプテンを務め、オックスフォードのSt. John's Collegeに進学して大学のラグビー・フットボールXVとして活躍し、さらにイングランド南部の代表としてもプレーを続けた名選手であった。また、彼の競技歴は、フットボールに留まらず、陸上競技でも傑出しており、1915年には、彼はAmateur Athletic Associationの会長となった人物であった。<sup>13</sup> こうした傑出した人物にORSの小委員会の人々が少々ジェラシーを抱いた、というのではない。両者の鋭い対立を理解するうえで、1930年に同じくORSによって出版された*Football Records of Rugby School*で言及される、次のようなラグビー校のフットボール発展に関する時期区分が有効となる。1) 1823-1850: William Webb Ellisの軽率な行為が次第に適用され、ルールに組み込まれてゆく学校内の発展の時期、2) 1850-1875: ラグビーフットボールが学校外で評価され始め、ラグビー・フットボール・ユニオンが結成された時期、3) 1875-1900: 学校がそのゲームの古き特徴を捨て、ラグビー・ユニオン・ルールを採用した時期、4) 1900-1929: ユニオン・ルールの下での発達の時期、というものである。実際、ラグビー校がユニオン・ルールを採用し、ユニオンに加盟したのは1900年10月のことなのである。Matthew Bloxamがラグビー校の校友会誌にラグビー校のフットボールの歴史を最初に投稿したのは1876年、William Webb Ellisによる<running with the ball>説を同誌に打ち出したのが1880年、Montague Shearmanが*Football: Its History for Five Centuries*を出版したのが1885年、より影響力を持ったと考えられるBadminton Libraryの一卷である*Athletics and*

*Football*を出版したのが1887年である。こうしてみると、「ラグビー・フットボールの起源」に関する論争は、ラグビー・フットボールとアソシエーション・フットボールの論争ではなく、ラグビー・フットボールにラグビー校のオリジナル・ゲームを残そうとしたORSと、ラグビー校の影響を受けつつも次第にラグビー・ユニオンのフットボールに未来のラグビーを託そうとしたShearmanとの熾烈な闘争であったと考えられるのである。そうすると、この論争は、ラグビー・フットボールの未来を決定しようとするヘゲモニックな抗争の一端であったとも理解することが可能なのである。勿論、これは仮説で、この点はより広範な研究によって解明すべき課題として残されなければならない。

#### IV. 報告書にみるORSの反論と調査法

ORSは、Shearmanの基本的な調査不足を批判した。「Shearman氏は、彼の助言の中で、Eton, Harrow, Winchesterの各校のフットボールに対する見解を、それぞれ、C.W. Foley, J.H. Farmer, J.E. Vincentの各氏に負っていると謝辞を述べている。しかしながら、彼はラグビーゲームに言及するにあたって、いかなるオールド・ラグビアンにも同じ程度の意見を聴取したようには思われない。そして、恐らく、彼が過ちを犯したのは、まさにこの事実に基づかれるのである。」<sup>14</sup> ORSは、Shearmanのそうした儀礼的な問題や調査不足を咎めた上で、主に二つの点から反論を試みた。一つは、「一校だけが広大な敷地の開けた草地のプレーグラウンドを殆どその設立時から持っていた」というShearmanの主張に対して、創立時にはプレーグラウンドを所有しておらず、それが整備され始めたのはごく最近であることを明らかにすることによって、もう一つは、元来、ラグビー校が行ってきたフットボールは、アソシエーション・フットボールに近いもので、<running with the ball>が1823年にWilliam Webb Ellisという生徒によって新たに導入されたというBloxamの説を実証することによってであった。

##### 1. ラグビー校のプレーイングフィールドの調査

ORSは、ラグビー校がその設立当初から、Bloxamが在学し始めた1813年頃まで、殆どプレーグラウンドらしきものはなかったと主張した。

「Shearman氏は、ラグビー校が我が国の総て

の学校の中で唯一、この目的のための十分に豊かで広い施設を常に保持、享受してきたことから、この<原始的なゲーム>(primitive game)を保持し得たのである、と考えようとしていることが明らかである。しかし、この独創的な理論も、諸事実によって確証された事例には何の役にも立たない。ラグビー校が<ほとんど設立の当初から>大きなプレーグランドを所持していた事はなく、設立から最初の二世紀の間、学校は正式なプレーグランドを全く持っていなかったのである。よく知られているように、元々の建物は町の中心部、教区教会の北側にあったのであり、1567-1749にかけて、学校はこの限られた場所に留まっていたのである。<sup>15</sup>

ORSは、Knail博士の校長時代(1744-1755)に生徒であった人物が1809年に*Gentleman's Magazine*に投稿した手紙の中で、「私は旧校舎に付属するいかなるプレーグランドも思い起こすことはできない。しかし、教会の庭(church yard)の向こう側に、時に生徒達によって用いられた一つのグラウンドがあった」<sup>16</sup>と書いているのを紹介しているが、そこでは「ビー玉や独楽回しや、時折のホッケーのゲームができるのがやつの広さしかなかく、また、それは学校に付属したものではなかった」<sup>17</sup>としている。また、Ackermannの*The History of Rugby School* (1816)を典拠にして幾つかの反証を挙げている。例えば、1748年頃、「校舎があまりにも狭い場所にあり、ここで勉強する生徒のレクリエーションのためのグラウンドや隣接する囲い込み地を持たず、結果として、教師や生徒にとって多くの不都合が生じている」<sup>18</sup>というラグビー校の窮状が指摘されていること、「今年(1816)になって理事会はこれらの囲い込み地(closes)の間にある柵壁を撤去し、溝を埋め立て、地面を均すことを命じた。こうして8エーカーの区域がいまや若者たちの様々な娯楽(amusements)に専ら利用されることになった」<sup>19</sup>という指摘を反証としてあげている。しかし、ORSのプレーグランドの「広さ」に関するShearmanへの批判は、「1749年-1864年の間にクローズが継続的に拡張されたことを示す地図を見よ」として添付した地図によって、最も雄弁になされ得たのであった。(図1, 2, 3を参照)

このように、第1の点はラグビー校のプレーグ

ランドとなるCloseが継続的に拡張されたことを示す具体的な地図を提示することによって、彼らはShearmanの「各校において、ゲームのルールはプレーグランドの収容能力によって定まった。そして、その性格において無限の多様性があったことから、そのゲームも多様なものになった」<sup>20</sup>という憶測に基づいて導き出した主張を退けることに成功したと言えよう。

## 2. 「Running with the ball」の調査

小委員会は、Shearmanの「我々の見出し得る限り、ラグビー以外のいかなる学校も、プレーヤーがボールを拾い上げたり、それを持って走ったりすることが許されていたり、彼の敵がカラーリング、ハッキング、チャージングやその他の好きな手段で彼を阻止できるような古い型のゲームを行っている所はない」という幾分か侮辱的な主張に対する壊滅的な反論を試みる必要があった。しかし、「running with the ball」が新しいイノベーションであるということの確証は困難を極めた。Ellisの事件以来、既に70余年を経ており、生き証人が少ないことが大きな理由であった。実際、ORSは、このイノベーションに関する限り、Bloxxamの書いた*Meteor*への投稿記事の内容を繰り返しなぞることしかできなかった。Shearmanに有効に反論するためには、是非とも新たな事実を独自に模索する以外に方法はなかった。先ず、最も有力なインフォーマントと考えられたTom Brown's *School Day* (1857)の著者であるThomas Hughesに情報を求めた。

1835年3月14日付で、Thomas Hughesから回答が寄せられた。彼は*Phootoballmaxia*と題された1839年頃の生徒の書いた詩をもとにして、その頃に<ランニング・イン>(running in)が一般化しつつあったとし、「私が学校に入った1834年には、ゴール内でタッチ・ダウンスることによってトライを得るためにボールを持って走ることは絶対的に禁止されてはいなかった。当時のラグビー校の陪審員であれば、もし生徒が<ランニング・イン>で殺されたとしたら、<正当な殺人>(justifiable homicide)であると評決していたことであろう。こうした行為はよく行われるようになり、ますます容認され、まさに1838-1839のJem Mackieの偉大な<ランナー・イン>(runner in)の武勇からむしろ一般的なものになってきたのであった」と指摘した。また、「1841-1842に私がビッグ・サ

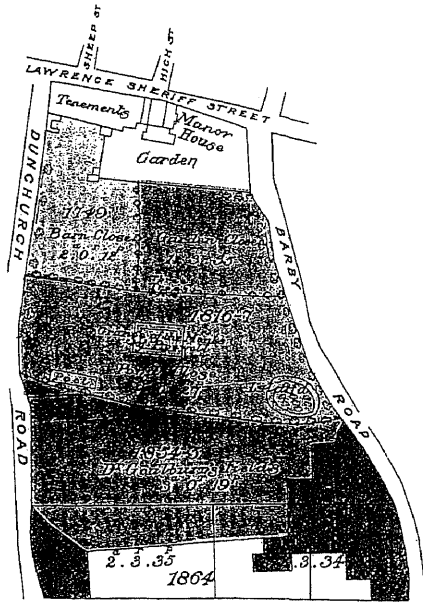


図1：1749年からの「クローズ」の拡張動向  
 J.Macrorry: Running with the Ball.  
 Collins Willow, 1991, p.32.

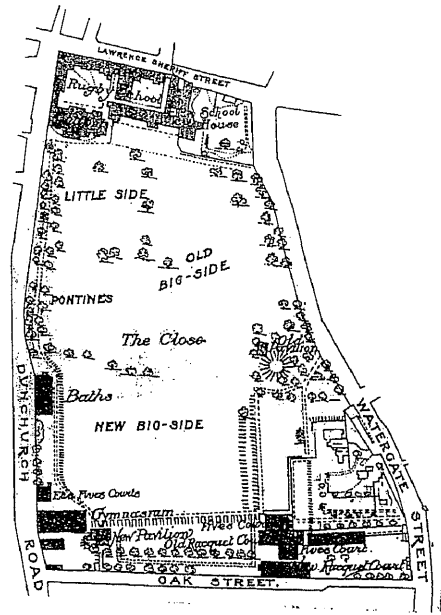


図2：「クローズ」の境界柵の撤去(1816-17)  
 J.Macrorry: Running with the Ball.  
 Collins Willow, 1991, p.32.

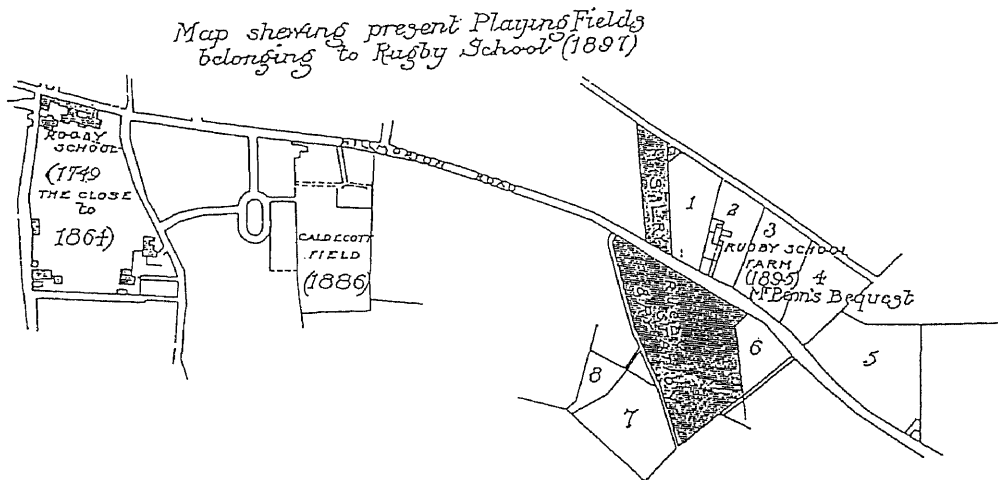


図3. 1897年のラグビー校の運動場  
 ORS: The Origin of Rugby Football. A.J. Lawrence.

イド(Big Side:学校のゲームの統括機関)のキャプテンであったころ、一時、われわれが解決した(と信じていたのだが)ものには未だ議論の余地のある問題が残っていた。<ランニング・イン>は次のような制限の下で合法であった。①バウンド中にボールは捕らえられなければならない、②キャッチャーはオフ・サイドではないこと、③<ハンディング・オン>(handing on)は禁じられたが、キャッチャーはボールを運び、自らタッチダウンしなければならない、という三点であった。<sup>21</sup> Hughesはこうした貴重な情報を提供しつつ、50年代と60年代のフットボールが「最良の形式」<sup>22</sup>であったこと、「Matt. Bloxamが、彼の時代に、<ランニング・イン>は知られていなかった、と主張するのは正しかった」<sup>23</sup>と考えていること、そして「<Webb Ellisの伝説>が私の時代まで生き残っていなかった」ということを伝えたのであった。

ORSは、再度、Hughesに手紙を出し、①Hughesの言及したルールは成文化されているのか、②ギリシア語の詩、*Phootballmaxia*とは何なのか、③BloxamとHughesの時代の間に生存するOBがいるかどうかを問い合わせた。ORSの委員Wilsonに対して、Hughesは、①ビッグサイド・レビューでの決定は、当時、文書に残さなかったこと、②ギリシア語詩*Phootballmaxia*は、恐らくA.P. Stanleyの時代のFranklin Lushingtonの作になるもので、1838年か1839年のSixth Match(6年級のフットボール試合)を英雄詩的に書き上げた戯文(skit)であること、③生存するOBとして、1837年に学

校を去ったH.H. Gibbs (Aldenhams 郷)を紹介できること、を伝えたのであった。小委員会は、こうしたHughesの指摘に基づいて、またそれを皮切りにして、次々と手紙による情報の収集を開始したのであった。

### 3) 回答者とW.W. Ellisとの関係

小委員会の報告書『The Origin of Rugby Football』に回答を寄せた正確な手紙の数は報告書に明記されていないが、引用された手紙の数は全部で18通、回答者の数は15人であった。そのうち、William Webb Ellis の在学期間(1816—25)と重なるのは、回答者ではないがMatthew H. Bloxam (1813—1820)とT. Harris (1819—1928)の僅か二人しかいない。1823年後期にEllisがボールを運ぶという事件が実際に発生したとすると、それを目撃した可能性のあるのは、T.Harrisのみとなる。因みに、回答者の入学年度毎の数をあげると、1819年(1人)、1828(1人)、1829年(1人)、1830年(5人)、1831年(2人)、1832年(1人)、1833年(2人)、1834年(1人)、入学年度不明だが1838年頃在学していた者(1人)であった。(表1参照)当然の事ながら、回答者の総てはEllisのイノヴェーションについて言及することはなかった。こうしたことから、本来、Ellisの起こした事件に関する情報を収集しようとした当初の目的は頓挫した。従って、報告書は「running with the ball」の慣習があったのか、なかったのか、或いは合法であったのか違法であったのかに焦点を絞ることになった。Harrisは具体的なEllis像を提供しようとしたが、それも不可能であった。「W. Webb Ellis氏と

表1. 回答者と在学年度

回答者(入学・在学年次)	入学・在学年	手紙の宛先	差し出し年月日
A: M.H. Bloxam	1813—1820	Meteor(1876, 1880)への投稿記事	
B: T. Hughes	1834—1842	①Dear Sir, ②Dear Mr. Wilson	①1895年3月14日、②3月18日
C: H.H. Gibbs	1832-1836	Dear Sir,	1895年3月22日
D: J.R. Lyon	1830年8月入学	My dear Gibbs,	1895年3月24日
E: F. Lushington	1838頃在学	①Dear Mr. Wilson, ②Dear Sir,	①1895年3月24日、②1896年2月25日
F: J.W. Cunningham	1833年5月入学	Dear Sir,	1895年5月9日
G: G.C. Benn	1830年8月入学	Dear Sir,	1895年5月16日
H: A.J. Arbuthnot	1833入学	Dear Sir,	1897年2月1日
I: Henry Homer	1828年8月入学	Mr. Morris Davis,	1895年5月11日
J: T. Harris	1819-1828	①My dear Homer, ②Dear Sir,	①1895年5月13日、②5月25日
K: H.G. Allen	1829年7月入学	Dear Mr. Stephen	1895年11月11日
L: J.C. Fowler	1830年9月入学	My dear Allen	1895年11月12日
M: R.W.P. Birch	1831年12月入学 P. Birchの息子	Dear Sir,	1895年6月6日
N: S. Garratt	1931年9月入学	Dear Sir,	1895年5月2日
O: O.H.R. Nevill	1830-40	My dear Wilson,	1897年5月4日
P: F.H. Deane	1830-39	Dear Sir,	1897年2月7日

(筑波大学 阿部生雄 作表)

彼の行いに関しては、貴殿は、私が彼の数年下であったこと、また彼のプレーのやり方を観察する理由も機会もなかったということを理解してもらいたいと思います。しかしながら、当時の優れたプレーヤーによって、それは一般的にアンフェアーとみなされていたことは確かです。」<sup>24</sup>

#### 4) 「Running with the ball」の登場

報告書に寄せられた手紙の中身を集計したものが表2である。「running with the ball」の事項に関しては、回答者の総てが言及している。しかし、その内それが認められていなかったとしたのは、Ellis伝説を最初に提唱したBloxamを除けば、

表2. 『ラグビーフットボールの起源』(1897)の調査結果

回答者(入学・在学年)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
回答年月日	80. 22/12	95. 14/3	95. 22/3	95. 24/3	95. 24/3	95. 08/5	95. 16/5	97. 01/2	95. 11/5	95. 13/5	95. 11/11	95. 12/11	95. 06/6	95. 23/5	97. 04/5	97. 17/2	96. 25/2
1) picking up	×	○		○			×			×		○	×		×	▲	
2) running with the ball	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
3) running in	×	○		○		○						○	△		△		○
4) catch(1)	○	○				○	△			○	△		○		○	○	
5) catch(2)		△				△	○			○	△		?		○	○	
6) fair catch	△									△					○	○	
7) punt	○														○	○	
8) drop kick		○					○			○		○	△		○	○	
9) place kick	○									○						○	
10) off side	×	×			×	△		×									
11) hacking	○		○	○	△	△				△		△		○			△
12) collaring				○	△					×		△					△
13) goal(point)	○			○						○						○	
14) goal(line)				○						○						○	○
15) touch(down)		○		○													
16) touch(side line)	○														○ (kick)	○ (throw)	
17) choosing players	○															○	
18) number of players	20 + a						15 - 20										
19) formation	○				○											○	
20) match	scratch				school												
21) costume	nonspecific																
22) handing on		×					?										
23) knock on		○															
24) maul		○															
25) big side	○	○		○													
26) try				○						○		○				○	
27) post																○	
28) stroke										○	△				○		
29) kicking distance											○						
30) intercept												○					
31) bar												○					
32) scrummage																○	
33) mark																○	
34) knock																○	
35) tackle									○								

×：事項が言及されていてルール上禁止されているもの。  
 ○：事項が言及されていてルール上認められているもの。  
 △：事項にはっきりと記載していないがルール上存在していたと考えられるもの。  
 ▲：事項にはっきりと言及していないがルール上違反とされていたと考えられるもの。  
 ?：回答に不明と記載されているもの。  
 空欄は言及していない事項。

(筑波大学 阿部生雄作表)



Ellisと同じ頃学校に在籍していたHarrisのみである。Ellisがボールを持って走ったのが1823年、彼がラグビー校を去ったのが1825年であった。Harrisが卒業したのが1828年である。その後ラグビー校に入学して報告書に情報を提供した人物の中で、EllisやHarrisの在学期間に近い人物の入学年度は、Henry Homerの1828年8月入学とH.G. Allenの1829年7月入学であろう。Homerは「私の記憶する限りでは、もしボールを保持し得たなら、そのボールは運んでよかったです」<sup>25</sup>とし、Allenも「1830年～1833年の間、私はかなりコンスタントにこのゲームをしていました。しかし、ボールを運ぶことは、それが時折行われることであったということは思い出しますが、この点に関するルールがあったかどうかを思い出すことはできません」<sup>26</sup>と述べ、この数年の間に、ボールを持って走ることが、時折起り得る慣習になっていたことを証言している。しかし、HomerとAllen以後、「running with the ball」は定着したように思われる。1830年に入学したJ.R. Lyonは「可能ならばボールを拾い上げ、それを持って敵のラインを通過することが許されていた」<sup>27</sup>とし、George C. Bennも「私はボールを持って走ることを認めないルールというものを記憶していません」<sup>28</sup>としている。

一方、地面からボールを拾い上げる「picking up」に関しては、認められていなかったとする証言が1830年頃までの入学生に支配的である。例えば、1830年入学のGeorge C. Bennは「グラウンドからボールを拾い上げることは、全くの間違いと考えられており、許されていませんでした」<sup>29</sup>と指摘し、またH.R. Nevillも「いかなる場合も、またどのような状況にあってもグラウンドからボールを取り、走ることはフェアではなかった」<sup>30</sup>としている。しかし、同じく1830年に入学したLyonによれば、既に指摘したように「可能ならばボールを拾い上げ、それを持って敵のラインを通過することが許されていた」という。こうした同時期の在校生における記憶の相違は、この頃に「picking up」も慣習化する方向にあったことを示唆している。

こうした調査の結果、ORSは大筋、次のような結論に到達したと考えられる。

- (1) 1820年にラグビー校で流行していたフットボールの形式は、今日ラグビー・フットボ

ールとして知られているものよりも、アソシエーションにおおよそ近いものであった。

- (2) 1820～1830年の間のある日にボールを持って走るというイノベーションがもたらされた。
- (3) このことは1823年の後半にW.Webb Ellis氏によってなされたといわれる。あくまでも可能性であるが、彼はBloxxam氏によってそのことを発明したと信じられており、彼の行為は「unfair practices」と当時一般的に呼ばれていた。
- (4) この刷新は、しばらくの間その合法性を疑われていたが、徐々にゲームの一部となり始めたのであり、1830年から1840年の間に慣習的な地位を獲得し、1841年～1842年のビッグサイド・レヴィー (Big-side Levee) でようやく初めて合法化され、最終的に1846年のルールによって規則化された。

1900年、こうした調査結果を得て、スクール・ハウス前の壁にWilliam Webb Ellisの「偉業」(exploit)を讃える石板が取り付けられた。Ellisの「偉業」は伝説となり、そしてラグビー校のRugby Unionへの加盟に伴って、「神話」となった。

## V. 結論

ブレーグランドの調査を別にすれば、ORSの小委員会の調査は不十分なものであった。何よりも、William Webb Ellisに関する証言は全く得られなかったし、Matthew BloxxamがMeteorに投稿して主張したEllisのイノベーションに対する確証を得られぬまま、それを追認することになった。「Running with the ball」や「picking up」に関しても、必ずしもそれらの「新たな」出現の時期を確定することができなかった。それでも彼らはボールを「ピック・アップ」し、「ボールを持って走り」、「ゴールに飛び込んだ」というEllisという人物を、ラグビー校のフットボールの本質を偶然に築き上げた伝説的な人物とする必要があった。その背景には、学校間の熾烈な対抗意識が存在していた。Montague ShearmanがEton、Harrow、Winchester、Charterhouse等のパブリックスクールを調査したのに対して、ラグビー校を無視したという反感が、ラグビー校関係者、とりわけORSの会員に存在した。その反感は、ラグビー校のフットボールを「古い型のゲーム」とか「原始的ゲーム」という表現によって増幅した。小委員会の調査は不

十分であったが、*The Origin of Rugby School*の出版は、少なくともMontague Shearmanの反省を引き出すことに成功したのであった。バドミントン・ライブラリーで新たに編集し直して出版した*Football* (1901)で、Shearmanはラグビー校のグラウンドについての自分の言及の誤りを認め、ORS小委員会の調査の努力を評価した。しかし、<primitive game>という表現に関しては、持論を譲ることはなかった。「その委員会は…私の見るところ、正しい主張をしていると思う。そして、その真理とは、今世紀の前半にラグビー校が豊かなプレーグラウンドを持つことになったことから、本質的に<primitive game>に類似した、そしてまた総てのプレーヤーがボールをピック・アップし、それを持って走ることができ、総ての相手が彼をカラーリングやハッキングやチャージングやその他の好きな手段で止めることが出来るようなフットボールのゲームを發達させた、ということのように思われる」<sup>31</sup>と皮肉を述べた。Shearmanは決して「文明化」の点で、彼の持論を放棄することはなかった。実際、フットボールは単なるレクリエーションとしての学校ゲームであったというよりも、それを行う生徒、延いては学校の「文明度」を象徴するものであった。自校のフットボールが「野蛮」なものから「文明人」に相応しいレクリエーションに「進歩」することが求められていた、と考えてよいであろう。19世紀イギリスのスポーツの方向性を探るとき、月並みではあるが、Norbert EliasとEric Dunningの展開した「文明化の過程」の理論が、有効となるであろう。しかし、そうした「文明化」への歩みに照らしてEllis「神話」の意義を問うとき、Ellisは「文明化」を促進しようとしたのであろうか、あるいは「原始化」(野蛮化)しようとしたのであろうか。「文明化の過程」を注意深く考えてゆく必要があると思われる。

更にもう一つ、ORSとShearmanの論争を読み解く上で不可欠な点が存在した。それは学閥、伝統主義の根強さ、競技界のヒエラルキーといったもののアマルガムがこの論争の対立軸を構成していたという点である。ORSがShearmanに向けた憤りは、単に儀礼的な理由や、調査の手抜きにあってだけではなかった。既に指摘したように、Shearmanの立場は微妙であった。というのは、ShearmanはMerchant Taylors' 校の出身者として、また当時の代表的なプレーヤーとして、

更にRugby Unionのルールの推進者として、ラグビー校のフットボールの「伝統」と戦わなければならなかった。ラグビー校がそのゲームの古き特徴を捨て、ラグビー・ユニオン・ルールを採用した時期とされる1875-1900年の間に生じたこの論争は、1900年にラグビー校が正式にラグビー・ユニオン・ルールを採用したことから、ORSの目論見の挫折と見ることができよう。しかし、その挫折の見返りとして、ORSの報告書は、Ellis伝説の確証を提示しないまま、そのEllis「伝説」を不可侵の「神話」に仕立て上げ、ラグビー校こそがラグビー・フットボールの發祥地であるという認識をRugby Unionに持ち込み、君臨することを可能にした、と考えることも出来よう。

#### 引用文献

- <sup>1</sup> Dunning, Eric., Sheard, Kenneth. *Barbarians, Gentlemen and Players. A Sociological Study of the Development of Rugby Football.* Martin Robertson, 1979, p.60. (大西鉄之佑、大沼賢治共訳「ラグビーとイギリス人：ラグビーフットボール發達の社会学的研究」ベースボールマガジン社 1983、74-75頁を参照)。
- <sup>2</sup> *Ibid.*, p.60.
- <sup>3</sup> *Ibid.*, pp.60-61.
- <sup>4</sup> *Ibid.*, p.61
- <sup>5</sup> *Ibid.*, p.61.
- <sup>6</sup> *Ibid.*, p.60.
- <sup>7</sup> *The Origin of Rugby Football. Report (with Appendices) of the Sub-Committee of the Old Rugbeian Society.* A. J. Lawrence, Printer to Rugby School, 1897.
- <sup>8</sup> *Ibid.*, p.11. この点については、Macrory, Jenifer. *Running with the Ball: The Birth of Rugby Football.* Collins Willow, 1991, p.,24 も参照。
- <sup>9</sup> Bloxam, Matthew Holbeche. Rugby School Football Play. *The Meteor*, 22<sup>nd</sup> December, 1880. (quoted in *Football Record of Rugby School, 1823 - 1929*, George Over Limited, 1930, pp.19-20.
- <sup>10</sup> *Ibid.*, pp.18-19
- <sup>11</sup> Shearman, Montague. *Athletics and Football*, (Badminton Library), Longmans, Green and Co., 1887, p.272.
- <sup>12</sup> *Ibid.*, pp.273 - 274.
- <sup>13</sup> Smith, George, edited by J.R.H. Weaver, *The*

*Dictionary of National Biography*. 1922 – 1930,  
Oxford University Press, pp.767 – 768,

<sup>14</sup> Op.cit., (Report) p.3.

<sup>15</sup> Ibid., p.5.

<sup>16</sup> Ibid., p.6.

<sup>17</sup> Ibid., p.6.

<sup>18</sup> Ibid., p.6.

<sup>19</sup> Ibid., p.7.

<sup>20</sup> Op.cit. (Shearman, M.) p.271. 尚、この指摘は、Shearmanの*Football: Its History for Five Centuries* (1885)で得られた「結論」(conclusion)であった。

<sup>21</sup> Op.cit., (Report), pp.12 -13. 尚、①の「バウンド中にボールは捉えられなければならない」という指摘には、ORSは次のような注を付している。「この点は1874年にビッグ・サイド・レヴィーによって変更されるまで、ゲームのルールとし

て残った。その後、ラグビー・ユニオンによって採用されている<rolling game>は<picking game>にとってかわる。即ち、ボールがバウンドしている時と同様にローリングしている時もボールを取り上げることを認めるものとなる。」

<sup>22</sup> Ibid., p.13.

<sup>23</sup> Ibid., p.13.

<sup>24</sup> Ibid., p.20.

<sup>25</sup> Ibid., p.18.

<sup>26</sup> Ibid., p.21.

<sup>27</sup> Ibid., p.16.

<sup>28</sup> Ibid., p.17.

<sup>29</sup> Ibid., p.17.

<sup>30</sup> Ibid., p.24.

<sup>31</sup> Shearman, Montague., et.al. *Football*. Longmans, Green, and Co., 1901. p.35.